中日文化の比較研究

賈　蕙萱

はじめに

皆様こんばんは。年の瀬の大変忙しい中お集まりくださいまして、また私のつたない日本語の講演をご静聴下さることに対しまして、心より御礼申し上げます。そして、今回の講演のためにいろいろとご準備下さった東洋哲学研究所の諸先生にも、深甚なる謝意を表するものでございます。

それでは、本題に入らせていただきます。よりよくご理解いただくために、私は、できるだけ身近な文化、私の研究する民俗文化を以って説明するつもりです。学術的な講演会は、無味乾燥とか、分りづらいとか、そのようなイメージが強いので、それを避けるために、いろいろなエピソードを例として説明してみましょう。

異国文化を比較するには、もちろん極端な典型的な例もありますが、私は一般的な法則から、その民族文化の傾向を手掛りにしたいと思います。全く個人の見方ですから、ご賛成でなくても結構です。中日両国の文化比較をすると、言うまでもなく、共通点も多いのですが、今日は時間の制限により、主に文化の差異を

巡ってご報告させていただきます。

一　文化の意味について

今に至って、文化の共通認識についての定義はまだありません。私の知っている限りでは、文化について二百種以上の定義があります。この点から見れば、文化の範囲はとても広いということが言えます。

池田大作先生の文化についての定義は、こういうふうに書かれてあります。「文明、文化とは、端的に言えば〈生き方〉と言ってもよいだろう」（「人生抄　池田大作箴言集」一九四頁）　私個人の見方では、文化とは人間の生活の中で錬磨した智慧だと思います。

私の比較文化研究は、正直に言えば失敗からスタートしたものです。どのような失敗かと聞かれれば、枚挙にいとまがないほどです。私は若い時に十数年間中日友好に携わったことがあります。その時期に、いろいろな失敗がありました。その中の典型的な例は、一九七二年の年末に年賀状をたくさん買ってきた時のことです。そのときの中日友好協会の会長は日本通の廖承志先生でした。会長に年賀状を持っていきサインしてもらって、日本の友人に送るつもりでした。その年は、子の年でしたが、買ってきたのは猫の模様があるとてもきれいな年賀状でした（笑）。廖会長に「賈さん、だめですよ。この年賀状が日本の友人のところに届いたら、ネコはネズミを食べてしまって、年賀にならないだけでなく、不吉祥ですよ」と言われ、キャンセルされました（笑）。

もう一つは、日本の方のご結婚をお祝いするために、会長の代行として蓮の花の結婚お祝いカードを買ってきました（笑）。中国では、蓮の花はとても高く評価される文芸の永久的なテーマとなる植物です。文学とか詩とか、また絵などによく出てきます。そして、花だけでなく、葉、根、茎、実などいずれも絵になります。それに、蓮は意味深長な寓意を有します。具体的に言えば、蓮は廉潔の象徴であり、汚泥から出てきても全く汚れのないものです。蓮はいつまでも政府役人の〝優れた模範〟です。だからこそ中国人は、蓮の絵を常に家に飾って立派な人間を目指します。蓮、特に蓮根の

ある絵は、良い人間になりなさいという警鐘であると言ってもいいでしょう。それゆえ、お祝いカードとして送ろうとしましたが、瀬戸際で先輩に中止させられました。日本では蓮の花は、葬式の時とか法事の時とかに使うものだと後になって知りました。

その後も私は、次々に失敗に見舞われました。一九八二年の春、訪日する時に、宮崎滔天の甥にあたる中日友好協会宮崎世民理事長が、病気を患って入院しました。私が、友人よりいただいた麗しい盆栽をホテルから持って見舞いにいこうと思った時（笑）、華僑の同僚の皆さんから、「これはいけませんね、寝付く（根付く）ことになりますから」と止められてしまいました。うっかりすると悪い結果を引き起こす大失敗でした。私の失敗のほとんどは日本の習慣が分らないせいでした。

また、中国の習俗を知らない日本の方の失敗もあります。百人の大型訪中団が中国の招請団体に心を込めて作ったプレゼントは、大きな団扇に「祭」という字が描かれたもので、この周囲には百人の名前のサインがあります。それを丁重に差しだされ、もしチャンスがあれば、国家指導者にお渡しくださいと言われました。中国では、「祭」という文字は縁起の悪い意味が強いのです。他界された祖先と故人を祭る時に「祭奠」をよく使うので、指導者に渡す勇気はありませんでした（笑）。そのかわりに、見た人にちょっと変だと思わせるために、わざとそのプレゼントを機関の事務室に置きました。

このように、私には中日友好運動の中で体験した失敗談が多いのです。相手方の文化が分からなければ、特に相手の国の民俗習慣が分からなければ、うまく交流ができないばかりでなく、友情を傷つける心配もあります。それで、私は日本文化、特に民俗習慣の文化を研究し始めました。

よりよく研究するために、そして、外国の友人に中国文化を説明するために、自分の国の文化も研究しながら、中日の比較研究を始めました。まだ不十分ですが、とても重要だと思っておりますので、生涯続けていきます。

二　中日文化の形成要因

次に、中日文化の形成要因についてお話しします。まず、それは必要に応じて形成するというわけです。かつて研究したスライドとか写真は今回持ってきませんでしたが、よりよく説明するために実物を持ってきました（笑）。必要によって、お箸はどういうふうに変化してきたか、比較するとすぐ分かります。

日本のお箸は元来二本ではなく、一本でした。即ちU型でした。今でも、皇室の新嘗祭を行うときにまだ使っています。遣隋使の小野妹子が二本のお箸を中国から持ちかえりました（隋は五八一～六一九年）。その後、日本の食生活の必要に応じて三つの変化を見せます。長さが短くなったこと、先が尖ってきたこと、置き方が横になったことです。中国のお箸はほとんど変わりませんでした。どうして日本のお箸にはそのような変化があったのでしょうか。私なりの〝理論〟から言えば、いかなる民族、いかなる国の文化も、その国の人民の必要に応じて発展していきます。ですから、日本のお箸の変化も立証できると思います。日本では魚介類の料理が食卓によく出るので、お箸の先は尖っていたほうが、魚の骨を取りだしやすいのです。銘々膳のときは、横の動作が割と多いので、お箸を手元に横に置きます。日本人は、食べる際に遠くから料理を取ることはめったにないので、お箸は短くても構いません。かえって材料が節約でき、一石二鳥の効果があります。

中国の場合は、大きなテーブルを囲んで食事をする風習があるので、お箸が長いほうが便利です。中国のお箸は、日本のお箸より二センチぐらい長いのです。縦の動作が割と多いので、お箸は縦に置きます。また、よく炒めて食べる習慣から、お箸の先が太いほうが油っこい料理を取りやすいです（笑）。

また、ご存じのように、日本は中国からたくさんの文化を受け入れました。とりわけ、奈良時代は中国文化ブーム、ひいては唐物崇拝でした。しかし、唐代（六一八～九〇七）の文化を無差別には取り入れませんでした。つまり、必要に応じて受け入れたのです。例えば、宦官制度と科挙制度は導入しませんでした。

中国は、三千年ぐらい宦官制度を行っていました（紀元前一〇五〇～紀元一九一二）。宦官は去勢された男性で、皇室、宮廷の役人です。日本がこの制度を取り入れなかったのは何故でしょうか。一言で言えば必要がなかったからです。では、どうして必要なかったのでしょうか。日本の歴史から分析してみると、本当の意味での奴隷社会がなかったからです。日本には、中国のように生きている人を副葬品として埋葬し、奴隷を話ができる道具として使う歴史がなかったのです。また、宦官制度には、皇宮内、大奥で、男女関係を発生させないという役目もあります。日本の場合は、宮内庁に女官制度があるので、宦官という制度を取らなくてもよかったのです。また、日本では、長い間の平和社会で、健康的な人間に対するそんな残酷なやり方は受け入れ難かったという理由もあると思います。

科挙制度は、中国の官僚を選ぶ試験制度でした。その制度を、中国は隋から一千年あまり実行してきましたが（五八一～一九一二）、日本は取り入れませんでした。その主な原因は、必要がなかったからだと思います。日本の大貴族の勢力はとても強くて、彼らは自分の利益を代表する人を推薦して役人にするので、このような制度を改革して科挙制度をとるのはとても困難でした。もう一つの原因は、日本の天皇は中国の皇帝のように権力が強くなかったことです。天皇は、自分の意志で官僚を選択することができなかったのです。以上の理由で、科挙制度も導入されませんでした。

文化の形成にとって、環境も主な原因の一つです。私は近ごろ、創価学会初代会長の牧口常三郎先生の『人生地理学』という本を拝読しました。その本の啓発点は、気候、日光、海洋などが、人間に対して大きい影響を与えるということです。異なる環境によって、異なる文化を生じるということです。

例えば諺の中で、中国人がどうしても理解できないのは、「腐っても鯛」です（笑）。中国で生活していて日本での生活体験が全然ない人は、「どうして腐っても鯛なのですか」と、「鯛はどのような形をして、どれぐらい美味しいか」が全然ピンときません。翻訳者は、そういうふうに直訳すると中国人は理解できないので、

結局「痩せて死んだ駱駝でも馬よりは大きい」と訳してきました。同じ理由で、雪の比喩も中日で違います。中国では〝鵞毛雪〟です。つまり鵞鳥の羽毛のような雪です。日本では〝牡丹雪〟です。恐らく日本人はお花が大好きで、中国のようにあまり鵞鳥を飼わないからでしょう。要するに、文化への影響という点では、環境の要素がとても大きいのです。

もし八王子市の恩方に、それほど美しい夕焼けがなければ、「夕焼け小焼け」という童謡が生まれることはなかったでしょう。従って、人間自身のためにも、環境を守り、良い環境をつくるべきではないでしょうか。中日ともにある諺のように、「朱に交われば赤くなる」のであります。良い環境に恵まれたなら、良い文化を育てるばかりでなく、良い人間をも育てることができます。

三　性質からの分析

中国　大陸性文化
日本　海洋性文化

文化の性質から分析してみると、中国は「大陸性文化」に属し、日本は「海洋性文化」に属すると思います。普段、周囲の生活文化に留意すれば、この差異はどこにでも見られます。例えば、〝仙人の天下り〟と同類の神話について、その主人公は中国の場合はほとんど天、あるいは山へいきますが、日本の場合は海、あるいは島へいきます。

この類の神話は、まず中国に生まれて、後に日本に伝わってきたという記録があります。仙という漢字は最初は人という字の下に山でした。つまり「㐰」です。その字の意味は「人が山に居る」という意味です。山に長く生活すれば仙人になります。後に、段々変化して、「人偏に山」と書く「仙」の字になります。中国の同じ類の神話と言えば「田章」があります。田章という人物は、鶴と人間の間に生まれた男の子です。お父さんが若いときに、鶴の羽衣を隠したことがあります。それで鶴は着物がないから、天女に変身して田章のお父さんと結婚しました。結婚してから翌年に田章が生まれた。一緒に生活する中で、天女が羽衣を見つけま

した。それで天女はすぐ鶴の姿に変わって天空へ飛んでいきました。

日本にも、これに類似している神話がいろいろあります。例えば、「鶴のお嫁さん」はその中の一つです。主人公は嘉六と申します。嘉六という人は鶴を救ったことがあります。その縁で、鶴は美女に変わって嘉六と結婚しました。そして、嘉六の唯一の親類であるお母さんと一緒に生活しますが、その一家は暮らしが立たないほど貧しいのです。

美女は恩を返すため、何とかその家庭を困窮から救いたいと思い、嘉六に提言しました。美女は反物を織って、それを売ったらお金を儲けることができると思ったのです。それで、これから部屋に閉じこもって反物を織るので、絶対に盗み見をしないようにと嘉六と約束をしました。けれども、一週間をこえても部屋から出てこないので、嘉六は心配でこっそり見にいって、鶴が自分の羽を抜いて反物を織っている姿を見てしまいました。すると、美女は鶴の姿に変わって忽ち島へ飛んでいってしまうのです。

異なる環境によって異なる文化が生じるので、同類の神話でも、主人公の鶴の帰属は違います。

また、食文化から見ても、大陸性文化と海洋性文化の相違は特に目立っています。中国の料理は大陸性料理であり、日本の料理は海洋性料理であります。材料の性質から分析すれば非常に明確です。中国料理の材料のほとんどは、大陸でできたものであり、それに反して、日本料理の材料の大部分は、海からとったものです。中国人も魚介類を食べますが、海から遠い内陸の人達は、干物、また冷凍品を食べるほかありません。外国人の目に映る日本料理のイメージは、お刺身とお鮨です。外国人は日本料理の新鮮さを羨ましがります。

また、お客様を招いた場合に、料理を勧める言葉は中日両国で違います。非常に簡単な礼儀作法の一言ですが、とても海洋性と大陸性の違いがよく出ています。大陸の中国では、炒める料理をよく作りますから、お客様に「どうぞ温かいうちに召し上がってください」と言います。日本の場合は「新鮮なうちに召し上がってください」と言います。刺身の新鮮さは、海の幸の

中において比べられる物がありません。

また、中日の飲水習慣も違います。これもいろいろな誤解とエピソードがあります。中国は乾燥した大陸性気候なので、毎日たくさんの水を飲まなければ喉が乾いてしまいます。そして、中国では自動販売機が余り普及していませんから、皆大きいコップにお茶をたくさん入れて何回もお湯を注いで飲みます。長く外出する時には、携帯用ポットを持っていきます。これは中国の風物詩になると思います。日本は湿潤な海洋性気候ですから、お湯をあまり飲まなくても我慢できるようです。

去年の夏に私の友人が日本を訪れました。彼女に、いかがでしたかと聞きましたら、「異国感はほとんどなかったけれど、日本の茶碗は小さくて、また、七分目ぐらいで、それに一回しかくれません。大変お茶不足でした」と語っていました（笑）。私は彼女に、「それが日本の礼儀作法ですよ。中国の習慣を知らなくて、ご勘弁ください」と言いました。私は民俗文化の角度から解釈して、納得できますが。

四　伝統意識からの判断

中国　家族文化
日本　民族文化

伝統意識から判断すると、中国は「家族文化」ですが、日本は「民族文化」です。このような理論の根拠は、中国の場合は「伝宗接代」、つまり家系を代々に伝えていくことを非常に大切にしているという事です。また、中国に〝不孝有三、無後為大〟（孟子「離婁上」）という古い習俗がありました。日本語に訳せば「不孝に三つがあり、最大の不孝は後嗣なし」という伝統意識であります。後嗣がいなければ、最大の不孝なのです。後嗣は男の子を指します。ですから、親孝行の最高基準は、男の子を生み、その家系を絶やさないで継続していくことです。このような伝統思想があるので、多子多孫とか、多子多福とか、人口が多いほど力になるという言い方が時勢に応じて生まれました。それで中国の人口はずっと伸びてきました。一九七〇年代後

半になってから、仕方がないので、一人っ子政策を実行しています。また、出世し、一家を成し、業績を積む子は、祖先とその家系の名を挙げる立派な後嗣です。これは家族文化を生む代表的な言い方です。

また、中国人が家族を大切にするのも、家族文化を生む主な原因の一つです。中国では夫婦が共働きですから、ご主人が早く帰って子供の面倒を見て、家事労働を分担すると模範的な夫となります。女性解放へもプラスになります。このような風習を新中国政府は提唱しています。周恩来総理は国務院の男性に、上記の主旨のスピーチをされたことがあります。それに反して、私が聞いたところでは、日本では早く帰ったご主人はあまり甲斐性がないと思われているようです（笑）。というのは、友達がいないとか、上司に重視されていないと思われるからです。中日両国は相当近いのに、夫への評価は雲泥の差があります（笑）。

日本はいうまでもありませんが、単一民族、万世一系、島国の愛国心等によって集団の意識が強い。民族と集団のために奮闘努力する人が多いようです。日本と比べると、中国人の多くが家族のために働くと思います。

私は近ごろ、創価大学の郵便局に行って、「かつての郵政貯金の住所を変更したい」と尋ねると、「うちはこの業務はやりません。簡易郵便局ですから」と返事をしてくれました。この〝うち〟というのは、〝内〟なのか〝家〟なのか、私にはピンとこないのですが、恐らく私達のところはこの業務をやらないという意味だろうと思います。つまり、日本の方は自分の会社を〝うち〟としてあつかいます。集団意識が強いのはとても良いことです。日本国はこれらの人々を表彰すべきです。

五　歴史発展の過程から

中国　保守文化
日本　開放文化

歴史発展の過程から振り返って見ると、中国は「保守文化」、日本は「開放文化」だと思います。根拠は沢

山あります。中国の名前の由来からも分かります。紀元前三世紀頃、中国の秦・漢時代に、中華民族は天下の中心にあると自負して「中国」と名付けた名称です。

文化と文明の歴史がとても長くて古くて、それに世界の他の国へいろいろな影響を与えたことがあります。例えばお茶、シルク、陶磁器等は世界的範囲に広がりました。ですから、他国の文化を取り入れなくても十分だという間違った大中華思想を持ちました。これは保守文化の根源の一つです。言い換えれば、危機意識、あるいは憂患意識が足りません。他国の文化はあまり積極的に吸収しませんでした。かえって、外国の文化を吸収する障害になりました。

中国の保守文化の根拠についてさらに言うと、土地が大きくて物産が豊かなので、のんびりした思想を表す典型的な次の言葉があります。「東が暗くなったら、西が明るい」「南が洪水に見舞われたら、北が豊作である」というもので、全く憂患意識がありません。これは、民族の発展にとって一大障害です。その保守的な考え方を改めなければ、進歩は見られないと思います。

中国と比べて、日本人の危機意識はとても強いとしみじみ感じます。日本人の危機意識の由来には、浅見ですが、次の原因があるのではないかと思います。日本の国情に「三多一少」があります。つまり、地震、火事、台風が多くて資源が少ないから、差し迫る意識が強くなければ、日本という国は発展が出来ません。この恵まれない自然環境は、日本が他国の文化を積極的に吸収する促進剤になっていると思います。保守でない点は、日本民族の長所であります。私たち中国人が、日本人民に学ばなければならないところです。

近現代になって、中国も保守思想を改めようと決意しましたが、長い間患った疾患は治るのに時間が要ります。一九七九年から改善の転換期を迎えてきました。それは開放政策です。その政策が実行されて以来、情勢に差し迫って外国の文化をよく吸収しつつあります。特に、隣国である日本から多くの現代文化を学びました。概して言えば企業の経営方法と市場機能などで、社会文化から言えば、カラオケは典型的な例です。全中国の隅々まで、日本人が発明したカラオケが普及しました。カラオケを通じて日本文化が好きになった人が多くいます。他には、日本人が良く使っている漢字の語彙をそのまま取って使っています。例を上げると、「雰囲気」とか、「運営」とか、「空港」とか、新鮮さと便利さがあるので、皆に愛用されています。

今後、中国は保守を一掃して、各国の優秀な文化をどんどん取り入れなければならないと思います。人類文明のために中国人は引き続いて貢献すべきです。開放こそ進歩につながります。

六　文化の根幹からの観察

中国　喜情文化（もののよろこび）
日本　哀情文化（もののあわれ）

文化自身がとても複雑なものですから、文化の性格をはっきり判断することはなかなかできません。そのため、文化の根幹から観察して中日両国の文化の傾向を模索するしかありません。中国人は、物事への評価はできるだけ喜慶の方向に考えると思います。私はそのような文化傾向を喜情文化と呼んでいます。日本語に訳せば「もののよろこび」でしょう。「喜情文化」の誕生については、恐らく中国人が吉祥を求めるという理念と切り離せないと思います。吉祥という文字は、三千年前の西周時代の書籍「易・系辞下」に書いてあります。吉祥が和気を迎えます。和気が有れば豊かな生活を過ごすことが出来ます。一般民衆の諺にも、人間は喜ぶことがあると爽快になるという心理状態が表されているように、何かあれば良い方へ考えます。

中国の小説や映画や伝承物語などは、一般的に、読者を喜ばせるために、理想的な結末を以って終わらせる作品が多いのです。ひいては中国に喜喪という民俗習慣があります。喜喪というのは哀調の葬式ではなく、慶事のように行います。私の知っている限り、日本にはこの習慣がないと思います。かつては、”人生七十、古来稀なり“という言い方がありました。七十歳以上の人で畳の上で寝て死んだ場合、喜んでその魂を見送ります。一般的な中国の葬式は主な色は白ばかりですが、喜喪の場合は赤がいっぱいです。泣かないで、喜

んで納棺して見送ります。いろいろな飾り物も赤で、親友からの弔電も赤い紙で送ってきます。これは中国の特質的な文化です。そして中国の喜情文化の具体的な表れの一つでもあります。

日本人には「哀情文化」の傾向が強いと思います。「哀情文化」は「もののあわれ」という意味を指します。中国と違って、日本の文芸作品は悲劇的な結びが多いようです。『源氏物語』の中には、「もののあわれ」が一〇五七箇所に出てきます。また、日本の聖教新聞の中にもよく出てくる語彙の中に、「悲願」があります。中国では絶対「悲願」という言葉は使いません。「宿願」とか、「祈望」などを使います。「寂しい」とか「悲しい」という語彙はあまり使いません。不吉祥のイメージがあるからです。

貴国に来る前に、「男はつらいよ」という日本の映画を観てきました。主人公の寅さんは気に入った女性に会っても、肝心な時に言うべきことを全く言わないのです（笑）。惜しいというより、むしろがっかりしてしまったと言った方が適当と思います。どうして寅さんはそんなに女性に不運なのか、非常に同情心を抱いてしまいます。これこそ日本の文化だと思います。中国の作家であるなら、そのように書かないでしょう。

また、中日の離宮を例として比較しても相当違います。清朝時代（一六一六～一九一一）の北京の皇帝離宮は頤和園です。その天井や回廊は皆、派手な絵で飾られています。絵の色もきついです。そして同じ絵ではなく、それぞれ異なる歴史物語を描いてあります。

一度私は、中国の著名な文化人からなる訪日団と一緒に、関西への旅をしたことがあります。ある日、京都の桂離宮を見にいきました。入る前に係員は厳かに説明してくれました。特別配慮で入らせていただける理由、それに、桂離宮の重要文化財としての歴史、特徴など、非常に詳しく紹介してくださいました。訪日団の皆さんは高い期待感をもって見学にいきましたが、見終えてから団長は、「大したものじゃないね」と言いました（笑）。「桂離宮の建物は何の色もなくて、柱に全然絵もなくて、古くて、風を防ぐことも出来ず、その立派さはどこに見いだせますか」と言った人もいました。これは文化の差をよく表していると思います。喜情文化を見慣れた中国の文化人は、日本文化の〝寂び〟と〝侘び〟の美を、一度や二度見ただけでは分からないと思います。

七　思惟方法からの研究

中国　複雑文化
日本　単純文化

中国の文化は「複雑文化」という特徴があります。何故かというと、中国では朝代の更迭が速く、政治運動も多かったので、一般大衆はうっかりすると九族に連座する恐れがあるので、自己保護の意識が強くなり、思惟方法は複雑に変化してきました。それに厳しい大陸の気候により、複雑な思惟がなければうまく生存していけないという理由もあります。

日本は中国とは違い、長い間平和な社会でした。中国の元代（一二七九～一三六三）、政府軍は日本を侵略したことがありますが、海で暴風に見舞われて惨敗して帰りました。日本の国土では、歴史の中で大型の戦争はほとんどなかったと言ってもいいでしょう。そして、大変動の政治運動も少なかったようです。天皇も今が百二十五代ですが、制度としてはほとんど変化がありませんでした。長期間、安定かつ平和な環境の下で生活してきましたから、複雑な思惟方法が育てられなかったし、実際に必要がなかったのではないかと思います。

また、中日の文学作品には共通性がありますが、違う所も多くあります。古典小説について言えば、複雑文化と単純文化の差は明確です。

中国の『三国志演義』と日本の『平家物語』を例として比べれば分かりやすいと思います。両小説は大体同じ時期に成立した優秀な文学作品です。前者は十四世紀の元末明初の作品であり、後者は十三世紀初期、つまり鎌倉時代の著作です。いずれも戦争故事を描く歴史小説です。両国の文壇に対して相当の影響力を持ちました。これらの小説には今述べた共通点がありますが、異なる文化によっての相違点もあります。三点

ほど挙げてみます。

（一）典型的な人物描写について

『三国志演義』の人物への描写は、人を驚かせるほど芸術性が高いという読者の評価を得ました。その小説を読むと、諸葛孔明の智、曹操の奸、関羽の義など等人物に対する描写は成功した所がありますが、『三国志演義』と比べると鮮明性と典型性にやや欠けています。

（二）戦略の描写について

『三国志演義』は、戦を複雑な政治と軍事の闘争芸術として描きました。戦場で手柄を立てたのは武将だけではなく、諸葛孔明、司馬懿、周瑜等、軍師と策士も大きな役割を果たしました。彼らの豊かな戦略が魅力的に書き込まれています。『平家物語』は、戦争を単純な武装闘争として扱ったので、戦略の役割をあまり体現出来ませんでした。

（三）戦の描写について

『三国志演義』は、戦争小説の名にふさわしい巨作です。著者の羅貫中は兵法書を熟読し、戦略に長ずるインテリゲンチアです。本の中で各々の特色ある戦を、科学的かつ生き生きと、書き方を変えて描きました。それに比べて『平家物語』は、戦の描写は平淡かつ定型化の傾向があるので、読者を魅了する力が足りないようです。（趙榮生編集『中日文学比較研究』一二二頁）

上述の比較により、歴史、文化、環境等の各要素は、人間に対して想像以上の影響を与えます。それゆえ、中国の複雑文化は深度のある文学を形成しやすいけれども、日本の単純文化は人物の複雑な心理変化を描写し難いと私は思います。

これは決して中国人が賢く、日本人が愚かだという意味ではありません。日本の社会は、『平家物語』のような小説が生まれる土壌であるということです。

ある学者は、上記の文化について次の論議をしております。日本人の思惟方法は単純で直線的です。和服も直線で裁断し、愛用する風呂敷も四つの直角です。それに、歩く時には目的地にまっすぐいきます（笑）。それに反して、中国人の思惟方法は曲線です。中国人は歩く時にはあちこちを見ながら、ゆっくり前進します。ですから、日本人と中国人の動作を比較して見ると、文化の差異を知ることが出来ます。異なる文化は必ず異なる思惟方法を生むものです。

八　結び——文化比較の重要性

最後になりますが、文化の比較はとても重要だと思います。特に自分の携わっている仕事が異国に関わる場合、文化比較は欠く事が出来ません。これから、グローバル化を迎える時代に入って、国際交流は更に頻繁となり、相手の国の文化を知らなければ仕事がスムーズに出来なくなると思います。また、比較すると自国の短所、他の国の長所もよく分かるようになりますので、勉強する良いチャンスでもあると思います。

私はかつて、日本文化だけを研究して、自分の国の文化はあまり知らなかったので、弊害が出てきました。どちらが自国の文化でどちらが日本の文化なのか、見分けることが出来なくなってしまったのです。よりよく比較するためには、まず自分の国の文化をよく勉強しなくてはならないと思います。そうする事によって二つ国の文化を身に付けられます。比較を通して、相手国の長所がちゃんと分かってきました。

また、文化は生活の質を向上させる栄養剤だと思います。携わっている分野は工学であれ、理学であれ、知識を広げ、文化の素養を向上させるために、いろいろな交流が役に立ちます。そして博学になればさまざまな余談もできますし、多彩な話題も出せるので、生活は豊かになるにちがいありません。

私の研究はまだ浅いです。特に私の日本語はつたなく、深い意味の文化、とりわけ、言葉のニュアンスを身に付けていないので、うまく話せません。間違いが多いと思いますので、ご指摘くだされば有難いです。長時間ご清聴くださいましてありがとうございました。

（か　けいけん／北京大学教授）

（本稿は、二〇〇二年十二月十八日に行われた講演内容に加筆いただいたものです。）